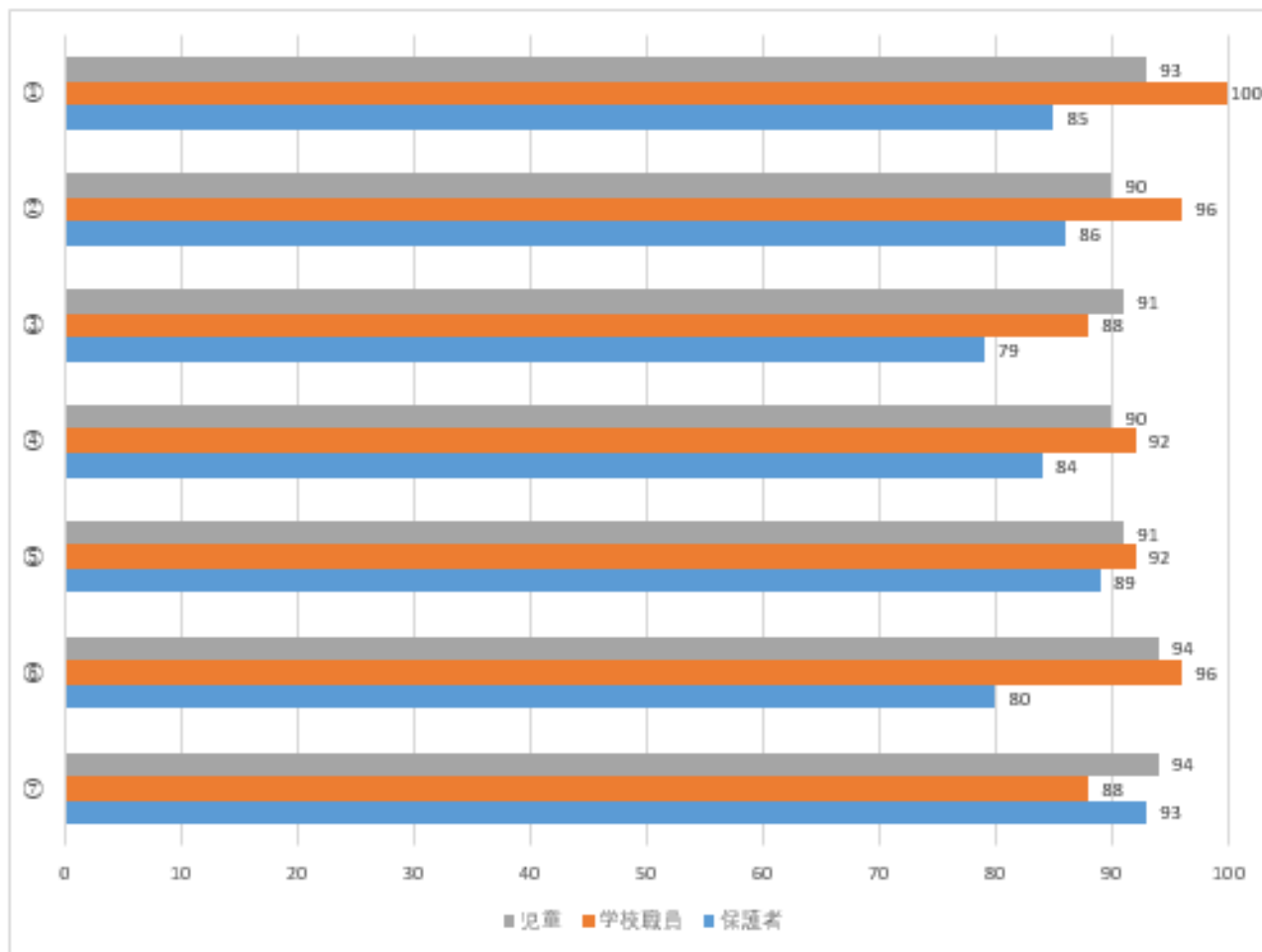


R 6 年度学校評価アンケート集計結果

浜松市立双葉小学校

昨年末には、学校評価アンケートに御協力をいただき、ありがとうございます。集計結果が出ましたのでお知らせいたします。

学校教育目標 「夢に向かってともに伸びゆく子」
 目指す子供の姿 「『やりたいこと』を見つけて、挑戦する子」
 重点目標 「【知】知りたいがいっぱい」
 「【徳】思いやりがいっぱい」
 「【体】元気がいっぱい」



～学校評価アンケート結果（とてもそう思う、まあそう思う 合計）～

<アンケート項目>

- ①「やりたいこと」を見つけて、挑戦している。
- ②やりたいことを見付け、進んで取り組んでいる。
- ③自分の伝えたいことを表現したり、相手の伝えたいことを理解したりしている。
- ④自分らしさを大切に、生かそうとしている。
- ⑤相手のことを思いやり、協力している。
- ⑥目標に向かって、あきらめないで取り組んでいる。
- ⑦学校のきまりを守って生活をしている。

<考察>

本年度も「夢に向かってともに伸びゆく子」を育てるために児童、教職員、保護者や地域の方々に「『やりたいこと』を見つけて、挑戦する子」を目指す姿として共通理解し、教育活動を展開してきました。そして様々な成果が得られました。その要因は特に次の2点にあると考えました。

1点目として、子供が学習や活動を自分事として捉え、主体的に取り組めるように全ての教育活動において「何のために」「なぜ」を問い掛けることから活動を始めたことです。年度初めの教科ガイダンスで全教科「なぜ〇〇科を学ぶのか」を子供たちに問い掛け、その教科を学ぶ意義や意味・価値を教師とともに考え、学習をスタートしたことで昨年度に比べ、特に個々では学びに広がり、集団では深まりが認められました。以下に3～6年生の活動における表を紹介します。

- (1) 3年生の理科では「不思議に感じたこと、疑問に思ったことをどのように解決するかの方法を考える力をつけるために理科を学ぶ」とまとまりました。「電気の通り道」の学習では、子供たちから「アルミホイルは電気を通したけれど、他の物はどうか」という疑問が出ました。そこで教師が「次回はどうしたいですか」と問い掛けたところ、「豆電球がつく物とつかない物をもっと調べてみたい」「教室の外にも調べに行きたい」など自発的にやりたい活動を提案し、次時以降も積極的に実験・考察等に取り組む姿がありました。
- (2) 4・5年生の宿泊行事「自然教室」では「なぜ自然教室に行くのか」という問い掛けに対し、子供たちから「仲間と協力して、もっと仲間のことを知るため」「初めてのことに挑戦するため」などの声が上がりました。それを基に子供たちはスローガンを話し合い、「仲間と協力し、初めてのことに挑戦しよう」とまとめました。事前の準備や当日の活動において、5年生は昨年度の自然教室で上級生から感じた思いやりを先輩として4年生に伝えたり、4年生は5年生のアドバイスを真剣に聞いたり、学年を越えて互いに仲間として認め合い、助け合う姿が多く見られました。また、みんなで話し合って決めたやりたい活動の「沢登り」や「フォトログイニング」では、初めての挑戦にも関わらず、仲間と協力し合って最後まで粘り強く取り組むことができました。
- (3) 6年生の「キッズチャレンジビジネス」では、昨年度の6年生から引き継いだことを基に話し合った結果、「私たちも浜松の伝統工芸品である遠州綿紬を多くの人に知ってもらいたい」という思いが生まれ、活動の目的が明確になりました。まず「遠州綿紬がどんなものなのか調べたり、話を聞いたりしてみよう」と自主的に動き出しました。次に「調べて分かったことをまずは全校に伝えよう」と七夕イベントを企画、運営しました。そして製品作りに取り組みしました。製作を進める中で、「自分たちの今の力だけでは、お客様に商品として満足していただくには十分ではない」と考えた子供たちは、学校支援コーディネーターを通じて紹介された地域の方に直接お願いし、自分たちが「サポートが必要である」と判断した製品作成作業の一部や模擬販売活動の接客練習に御協力いただきました。本番当日、緊張しながらも意欲的に声を出してお客様に製品を販売し、当初子供たちが願った遠州綿紬の歴史や良さについて伝えることができました。活動を終え、帰校した子供たちの表情には、やりきった満足感がありました。

2点目として、キャリア教育で育みたい「4つの力」の伸びや芽生えを、子供とともに見つめるように意識しました。運動会や自然教室、修学旅行、校外学習など大きな行事の前には4つの力を提示し、活動を通してどの力が高められそうかを考え、個々の目標を立てました。そして、行事の後にはどんな力が育ったかを振り返りました。個の振り返りを教師が認め、ほめることで子供たちは自身の成長や伸びを実感し、自信をもつことにつながりました。また、普段の学習でも4つの力を意識できるように、机の中にキャリア目標の用紙をおき必要な時に確認したり、黒板にそれぞれの力のキャリアプレートを貼って活動のめあてとして

明示したりしました。そうしたことで、子供たちは学びを通して変化・成長した自分を実感する機会が、また教師は子供たちの学ぶ姿を多面的に捉え、伸びや頑張りを認める場面がたいへん増えました。

このように様々な教育活動を通して子供たちが主体的な学びをし、自分を見つめ、知り、良さや得意を生かして活動してきたことが個々の自信につながりました。同時に仲間とはお互いの姿を認め合い、それに伴って必然的に思いやりのある言動が増えたことで、安心して活動できる場が築き上げられました。「個」の活動が充実したこと、皆で「協力」したこと、それぞれの良さをいかし「協働」したことの3点が相互に関係し合って、良い相乗効果を生み出し、個の成長や落ち着いた学校生活につながってきたと思います。今年度は主体的な学びの姿が、特別活動や生活科、総合的な学習の時間に顕著に認められましたが、教科学習においては十分な成果には至りませんでした。今後、教科学習においても主体的な学びの姿が認められるよう、さらに教師が単元構想を工夫・改善していくことが課題であると考えます。

※ 本年度も重大事案に至ったいじめは認められませんでした。その理由は2点考えられます。1点目は、児童アンケートの結果（とてもそう思う、まあそう思うの合計）がすべて90%を超えていることから、前述のとおり児童は様々な教育活動を通して、個々が自信をつけ、他者への思いやりが育ったことで、安心・安全な環境の下で落ち着いた学校生活を送れているからだと考えます。2点目は「学校いじめ防止基本方針」に基づき、「いじめの未然防止」「いじめの早期発見」「いじめへの対処」を全職員に徹底し、対応してきた結果ではないかと推測します。個の思いを生かす学校生活において、子供間のトラブルはあります。その大半は子供たちが自力解決しますが、中には子供たちの力だけでは収められない事案があります。そこには教師が介入し、関係者の話を聞き、どうしたいのか尋ね、全員が納得できるように支援してきました。このように常にアンテナを高くして児童を見取り、良い表れと同様に気になる様子が認められれば教員同士で情報共有し、迅速且つ適切に対応することを意識してきたことが、重大事案に至らないいじめにつながらなかったのだと捉えています。

しかしながら、年度末には職員の入れ替えがあり、担任が交代します。おのずと教師と子供との関係性は薄くなり、信頼の構築に時間を要することが予想されます。その際、重大事案につながるようないじめを起こさないために、次の2点に取り組んでいきます。1点目は、保護者の理解を得ることです。保護者が年度初めの子供の心持ちを理解し、子供の不安や心配を学校とともに受け止めていただくことで、早期発見・早期対応につながると考えるからです。そのためにPTA総会において「学校いじめ防止基本方針」を丁寧に説明したり、4月末の個別面談で担任から「友達関係で心配事があればいつでも相談してほしい」旨を伝えたりしていきます。2点目は職員間の情報共有を密にしていくことです。前年度からの申し送り事項を確実に把握し、学級開き後、児童がどのような表れをするのかしっかりと見取ることで、児童と教員の信頼関係の着実な構築につなげたいと思います。

また年度初めは、前年度担任も含めて築いたクラスの安心感が薄れる不安もあります。それ故にトラブルやいじめが起こりやすいという意識を教師は高めておく必要があります。そこで次の3点を常に意識していきます。1点目は、トラブルやいじめにつながる行為や言動を見逃さないことです。前述にもありますが、常にアンテナを高くし、子供たちの姿を見取っていきます。2点目は、保護者に説明した「学校いじめ防止基本方針」を、子供たちにもわかるように言葉をかみ砕いて説明することです。いじめとはどのような行為なのかを正しく理解し、相手を思いやって行動できる子になるよう、育てていきます。3点目は適時に適切な指導をすることです。どんな些細なトラブルであっても子供の声を聴き、その子供たちの成長過程に合った指導に努めます。

今後も思いやりのある集団づくりを心掛け、教師と児童の良好な関係、教師同士の連携を大切にし、いじめにつながる言動を見逃さずに指導していきます。